

なすからlife

Interviews by Niwa seminar



那須烏山が結ぶ人々の魅力に迫るインタビュー集



大学生が 地方暮らしの 魅力を探るの

地域を学び、地域に学ぶ

栃木県宇都宮市に位置する帝京大学の宇都宮キャンパスには、経済学部地域経済学科がある。同学科は「地域の活性化・再生を実現させることのできる人材を育成する」ことを目標に、経済学・行政学・観光学・地理学などあらゆる角度から地域と経済を考えるとこ

ろだ。
地域経済学科の丹羽ゼミ(担当教員: 丹羽孝仁)では、「地域を学び、地域に学ぶ」ことを目標に、学外で地域課題に関するゼミ活動が続けてきた。2年次のゼミでは平成29年度以来、栃木県那須烏山市をフィールドとして、地域課題の探求、調査、分析を行っている。

令和2年度のゼミ活動は、「那須烏山市の人口調査と魅力発見」をテーマとして学び、その一環で、那須烏山市に縁のある方たちを取材した。4ページ目以降の記事は、学生一人ひとりが1記事ずつ担当し、執筆したものである。こうした取材・執筆は学生にとって初めての経験であり、その内容には拙さが残るものの、取材対象者に誠心誠意向き合った結果である。本冊子と同一の内容をWeb媒体でも発信し、SNSではゼミ活動の様子が発信している。

二次元バーコードよりアクセスし、ご覧ください。なお、ゼミ活動に対しては、栃木県総合政策部総合政策課より「大学地域連携活動支援事業」の助成をいただき、本冊子を制作いたしました。



▲ 学生による取材、編集の様子



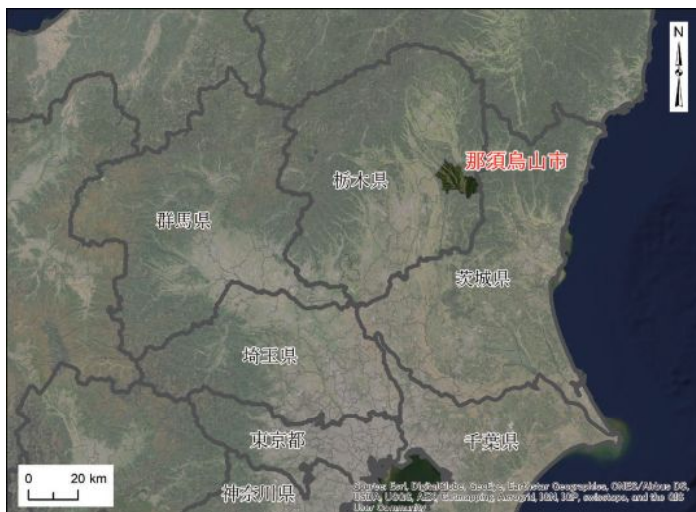
なすから帝京
Webサイト



なすから帝京
Instagram



上：紅葉の名所、境橋
下：満開の桜と竜門の滝
(出典：那須烏山市観光協会)



那須烏山市はどんなところ？
那須烏山市は栃木県の東部に位置し、県都宇都宮市から概ね30〜35kmの距離にある。平成17年10月1日に那須郡南那須町と同郡烏山町が合併し、那須烏山市が誕生した。町全体が八溝山系に属し、丘陵を縫うように那珂川や荒川、江川などの大小河川が平野部を貫流している。令和3年1月1日時点の人口は、2万5,567人だ。(出典：那須烏山市ウェブサイト)

栃木県内にある11の市の中で、最少の人口規模であり、すでに減少傾向にある。一方で、同市には有形・無形の魅力がたくさんあり、また那須烏山市に関わりのある人たちは素敵な暮らし方をしているようだ。



▲山あげ祭の様子

山あげ祭
「山あげ祭」は、永禄3(1560)年以来、450年以上の歴史をつないできた、日本一の移動式野外歌舞伎で行う夏祭りである。昭和54年には、国の重要無形民俗文化財に指定され、これは祭礼(信仰)部門において全国で2番目の指定だった。平成28年にはユネスコの無形文化遺産(山・鉾・屋台行事)にも登録されている。

山あげ祭は、旧烏山町の中心部にある6町の持ち回り当番制で実施されており、那須烏山市の伝統工芸品である「烏山和紙」を素材に、野外歌舞伎の背景となる「山」を制作し、移動↓組立↓公演↓解体↓移動を繰り返す。当番町はほかの5町にも訪問して野外歌舞伎を演じるが、町境で訪問の挨拶を必ず交わすなど、儀礼を重んじる文化が残る。当番町ごとに「山」の雰囲気や仕掛け、歌舞伎の演目が異なることも魅力の1つだ。



▲夜の公演で山をあげた様

自然体で仕事をする姿



〈プロフィール〉
越雲悠琢さん
那須烏山市出身 25歳
那須烏山市 職員
山あげ保存会 芸能部 所属

那須烏山市の税務課に勤務している越雲悠琢さんは、とてもおおらかな印象だ。その印象とは対照的に、毎年7月に行われる「山あげ祭」では歌舞伎役者として舞台に立つ。

平日は、仕事と家の往復。帰宅後や週末は共に暮らす犬や猫と遊んだり、趣味であるバスケットを楽しんだりしている。一方で、舞台の稽古も欠かさない。

那須烏山市に住み続けている。「なにか思いつめたことがあると、市内にある自然の中に行く。龍門の滝を見るのが好きだ」と教えてくれた。水が滝を落ちる様子を見たり、その音を聞いたりと、心が落ち着きリラックスできるそうだ。都会にはない那須烏山の自然が心を癒し、おおらかな性格を育んだのだろう。仕事に真摯に向き合いながら、プライベートも充実していて、仕事と生活のバランスが良く、現代を生きる社会人の理想の生き方だと感じた。



継続する力

高校時代は、部活動でバスケットボールに熱中。部内にはほとんど経験者がいないという状況にも関わらず、練習を重ね県北の大会でベスト4に入る実績を残した。現在も、那須烏山市や宇都宮市でバスケットボールの練習を続けている。毎週、舞台の稽古にも打ち込む。プライベートな自由と踊りに対する責任とがしっかりと両立されている。やるべきことはやる、継続してとことん打ち込む、という芯の太さがある。

山あげ祭に関わってきた23年間



▲山あげ祭の舞台に立っている越雲さん

「山あげ祭があるから、ずっと那須烏山市に住んでいる」と言うほどに、山あげ祭への熱量が大きい。初めての舞台は2歳の時。「母の指導を受け、気づけば舞台の上だった」と振り返る。山あげ祭が生活の一部となって育ってきたそうだ。お姉さんや甥御さんも参加しているという。「山あげ祭を成功させようと町全体が動くのが魅力」と言い切る。それは、町が1つになって1つの目標に向かっていくということ。幼い頃から祭りに携わっているのが、地域の人との関わりも深い。「山あげ祭の舞台に立つ達成感も大きい。一緒に稽古をしている子供たちの成長を、肌で感じ取れることも喜びだ」と誇らしげだ。山あげ祭は、地域の輪をつなぐ重要な役割を担っている。

担当：藤原鎌

農業が天職

中山正樹さんは20歳から60歳まで40年間農業に従事。梨園が4 ha、水稲が12 haある。昔は酪農も行っていたという。規模拡大を目指し日々挑戦を続けてきたベテラン農家だ。農業の楽しさは、作物と話ができること。手を加えた変化を返してくれること。

親が農業者で、きょうだい4人の末っ子長男だったため、子供の頃から後を継ぐという意識があったという。48歳の時には早くも息子に経営を移行。今は息子の手伝いを行い、家族で農業をやっている。息子に継いだ後、15年前から地元の農協JAなす南で非常勤の役員に就き、現在は代表理事専務。農協の方向性を決めていく。農作物は、どの箱を開けても、品質の差がないものを出荷するよう心がけているそうだ。小さな農協だからこそきめ細やかなチェックができる。特に梨の選果場が優れていて、梨が傷まないようカメラで選果し、転がさずに横移動する機械を使用している。今年は新型コロナウイルスで輸出事業は厳しいが、良い点を前面に出して、PRを強化する姿勢だ。



〈プロフィール〉
中山正樹さん 63歳
那須烏山市出身 JAなす南 代表理事専務

住み続けること

那須烏山市に住み続けていて、昔と今で変わった点について聞いてみると「農業は基本的に変わらないが、商店街がなくなった」と話してくれた。これは人の生活範囲の広がりや原因とみられる。また、若者などは都市に魅力を感じ、那須烏山市を出ていく傾向が顕著だ。15年前には旧南那須町に約1万3千人、旧烏山町に1万9千人いたが、現在は那須烏山全体で2万6千人ほどしかない。若者の都市への転出、未婚者の増加は、那須烏山の街や人々のライフスタイルに変化を及ぼした。「これから居住してくる人に期待している」と語った。

中山さんの家族は、ご夫婦と息子夫婦と孫2人。他に子供は娘2人。那須烏山市は、JR烏山線の沿線沿いに家を建てれば子育てに問題はないとのこと。そういう意味でも、烏山線は今後重要な公共交通だ。

「家族にも適切な距離があり、相手の事を考え、接しなくてはならない」と、プライベートを守るための適切な距離の重要性も語ってくれた。



若者へのメッセージ

農業という好きなことを仕事にしてきた中山さんから、「楽しんで仕事をやってもらいたい。お金は後からついてくる」とアドバイスをいただいた。農業の楽しみは枝の配置など自分の思い通りにできること。収入面でも成長を実感できたことも大きい。今は農協役員の立場からみる農業のあり方に興味を持ち、農業従事者を増やしたい考えだ。何よりもやる気があることを重要視する。自分をどう生かすかを考え、経験から学んでほしいという。好きなことで規模拡大という挑戦をしてきた中山さんの経験が語る。

「台風の被害や現在の新型コロナウイルスの問題など常に抱える問題はあるが、それも次に進むための経験だ」と前向きだ。好きなことをして生きているからこそ、嫌なことや問題を乗り越え、先の目標のために頑張れるのだろうか。

担当：深石義倫



何にもないからいい

親戚の誘いを受け、前から田舎暮らしを望んでいた日野さん一家は、1年ほど前に那須烏山市にやってきた。日野さんが移住した小さな集落にどんな魅力があるのだろうか。

意外にも、日野君香さん・正寛さんは「子育てに最適だ」と語る。「子供たちがこんなに元氣いっぱい遊ぶことのできる環境はなかなかない。森の探検や魚釣りなど、ここでしかない遊びがたくさんある」と言うのだ。子供が遊べる場所が少なくなっている現代で、遊びのフィールドが自然の中というのは、大きなポイントだ。大人になると自然と触れ合う機会は減っていく。今しかできないことを最大限に楽しむことができることは、ここに住む魅力といえるだろう。

生活を1から創り上げられるのも楽しみの1つだ。生活の全てを自分たちだけで賄っているわけではないが、できることは自分たちでやるように心がけていた。野菜を育てたり、薪割り



〈プロフィール〉
日野君香さん
栃木県宇都宮市出身 37歳
ターバン作家

日野正寛さん
鹿児島県出身 33歳
主夫

をしたりしながら生活している。日々の暮らしを、食などを通して創り上げることができるよう、自然豊かな那須烏山だからこそ。さらに、自ら生活を創り上げることで生きる力が身につくのも大きなポイントだと話していた。

現代の暮らしは、他人の力に依存していることが多い。そんな中で、自分だけで何かを生み出せる力を身につけるには、もってこいの環境といえる。

仕事は趣味の延長

君香さんの仕事は、ターバンの製作・販売。自宅でターバンを作り、インターネット上で販売している。作り始めたきっかけは、「ターバンが好き」というシンプルな想いだった。3年半ほど前から作り始め、今ではそれが仕事となり、人生の一部となっている。やりがいを感じると、「全てがやりがい」と答えた。イメージを形にすること、買ってもらえることなど、全てのこと。日野さんの原動力になっているようだ。きつと自分の好きなことを仕事にしていることで、全てを楽しむことができるだろう。

ターバンの注文は1日に何件も来る。なるべく早くこたえるために、決まった休みは作らない。好きなこととはいえ、一人で毎日たくさんのター



▲ターバンについて
楽しそうに語る君香さん

バンを作るのは簡単ではない。それでも休まず働くのは、一人ひとりのお客さんに喜んで欲しいからだ。楽し

みながらも、お客さんのことを第一に考え、絶え間なく働くその姿は、まさにプロフェッショナルな職人といえる。楽しみながらやること、お客さんを思いやって仕事をする、これが日野さんのスタイル。

愛情を注げるのは今だけ

子供は成長が早く、一緒にいられる時間は限られている。多くの愛情を注ぎ、多くの思い出を作るために、「子供たちと一緒にいれる時間を大切にしたい」と語っていた。



▲愛情あふれる日野さん一家

正寛さんは主夫として家事を受け持ち、君香さんをサポート。そうすることで、君香さんはターバン作りに集中でき、早く作業を終え、子供たちと多くかわることができるようになった。子供たちは、父親との時間を一般の家庭より多く過ごすことができているようだ。父親は働くべきだという固定概念にとらわれず、自分たちの家族の形を見つめることがこれからは必要になってくるはず。一緒に過ごす時間が増えることは、親だけでなく子供たちにとってもいい思い出となる。愛情をたっぷり注げる今を大切にしているご夫婦の生き方が印象的だった。

担当・多賀龍弥

生きる原点は食べて寝る

川崎さんご夫婦は車中泊で全国を旅しながら、毎日温泉に入り、道の駅などで生演奏をして人との交流を活発に行っている。くみさんは木笛のレッスンを栃木県を含む全国9か所で行う。

2人が那須烏山市に家を持ったきっかけは、「ゼロ円生活をしたい」という夢から。「今住んでいる場所は都市化が進み、もっと自然界に行きたい」と考えたそう。那須烏山のいい物件をたまたま目にし、住もうと決意。「栃木県には木笛のレッスンで来ているし、好きな温泉もあるのでピッタリ」。現在、茨城県つくばみらい市に住んでおり、月の3分の1ほどを那須烏山市で過ごす。

暮らし始めて、ご近所とは自然と仲良くなった。お隣さんとは趣味のギターで意気投合し、コーヒーを飲みながら話す仲だ。近所のおじさ



〈プロフィール〉
川崎くみさん 川崎清市さん
茨城県出身 60歳 東京都出身 62歳
音楽デュオ「音の旅人くみ∞せい」音楽家



▲田舎の生活について語る清市さん

んには、家に住み着いている猫の面倒を頼んだりもする。知り合いの家にお邪魔してミニコンサートを開くことも。

「那須烏山の人たちは素朴で人間味があって付き合やすい。すぐに打ち解けて10年20年付き合っている感覚」と語る。清市さんは、「生きることの原点は食べて寝ること」だと語る。車中泊も田舎暮らしも不便な面がある。しかし不便なことが何よりも自由を実感できるのだろう。

音は心

くみさんと木笛との出会いは20年前に遡る。農業や音楽を楽しみ伸び伸びと子育てしている叔母のもとへ毎日のように通ううちに、叔母が首に掛けていた木笛に興味を抱いたことが、人生の転機に。実際に演奏を聴き、心が洗われたように気持ちさがスッキリした。それから毎日のように木笛を練習し、教えられるほどの腕前となる。

清市さんは塗装屋で生計を立てながら、木笛のギター伴奏を担当。2人の出会いは10年前。くみさんは木笛の伴奏ができるギターリストを探していた。そんな折、音楽関係の知り合いの家にくみさんが遊びに訪れていたところ、仕事で訪れていた清市さんと出会った。お互いに音楽をすることを知った2人は意気投合。しかし

実際に音合わせをしたのは2ヶ月後だったそう。というのも「音は心。相手を知れば、どういいう音を出すか分かる。だから音を聞く必要はなかった」とのこと。毎日のように話をして、価値観を確かめ合った。

それからは、被災地や道の駅で演奏を続けてきた。人の輪を通じて全国からオフアーを受けるほどに。カバー曲中心だが、オリジナル曲も10曲ほどある。「今後はオリジナル曲にも力を入れたい」と意欲を語る。

ありのままの自分

くみさんは初対面の私に対してもオープンで、接しやすく話しやすかった。そんなくみさんも昔はネガティブ思考で、今とは真逆の性格だったそう。

彼女を変えたきっかけは、自動車の交通事故で、1ヶ月は全く動けなかった。「神様に『休め』と言われたような気がした」と言う。「考え方1つ」と思い至り、「痛みがあるということは治っている証拠」とポジティブに考えるようになる。「自分が強くなった気がした。人は何か究極なことがあると強くなる」と振り返る。

川崎さんご夫婦は、「ありのままの自分で、瞬間瞬間を愛と感謝で生きていく」という。2人のもとに人が集まるのは、かれらが心を開くことで相手も心を開き、深い関係を築いているからだろう。



▲木笛について楽しそうに語るくみさん

担当：小野恭佑

ダンス一筋

平成元年に旧南那須町で生まれた笹崎愛さんは、高校卒業後、ダンスを学ぶために上京。東京の世田谷に住み、毎週土日にダンスを教えるために那須烏山に帰ってきている。

小学生の頃からダンスを始め、中学校に上がった頃には東京に行くことを夢見ていた。「高校受験に失敗したら東京に行こう」と思っていた程である。高校卒業後、上京し、ダンススクールに通った。東京のダンスのレベルは高く、学生時代にスクールに通っていたときはセンターを務めていたが、外の世界に出てみると通用せず、何度も挫折を経験したという。

その後、21歳から那須烏山で施設を借り、サークルのような形でダンスレッスンを始めた。25歳の頃には生徒数が増え、責任を持って教えたいと考えるようになった。那須烏山にレッスンスタジオ「Rough Diamond」を設け、現在は子供たちに毎週ダンスを教えている。ヒップホップ・ジャズをメインにレッスンするが、ジャンル関係なくダンスが大好きだ。現在は、外部講師を呼んで教えてもらうこともあり、子供たちがたくさんのことを吸収できるように工夫している。



〈プロフィール〉
笹崎愛さん
那須烏山市出身 31歳
「Rough Diamond」
ダンスコーチ

ふ

笹崎さんにとって那須烏山というのは、人とのつながりがよく見え、道ゆく人々が温かく、まさにふるさとであるという。また、那須烏山で行われていた「いかんべ祭」のステージで育てられたといっても過言ではないという。小学4年生から高校生まで毎年参加していた。そのほか、ユネスコ無形文化遺産の山あげ祭にも参加をしていた。平成23年から参加をし、元々催し物のなかった山あげ祭だったが、商工会の企画により数度ステージに立つことができた。伝統文化に新しい文化を取り入れる点ではとてもよい試みになったと考えている。

新しい形で子供たちが輝けるよう、若い世代が行政へもつと意見をして欲しいが、エネルギーを割ける人が少なくなっているのも事実。那須烏山だからこそできることとして、ダンスを教え、生徒が教わったことをアウトプットできる場があることを挙げている。那須烏山を愛しているからこそ毎週戻ってきてダンスを教え、自らも成長しているのだ。



未来を担う子供たち

現在は、中学生をメインにダンスを教えている。教える中で信念としているものがある。1つ目に、「自分をきつかけに色々な所へ羽ばたいて欲しい」という思い。2つ目に、「東京と栃木の架け橋になる」こと。

今の子供たちは幼いころから習い事の1つとしてダンスと接しているため、到着地点が早い。そのために、やめるのも早くなってしまっている。プロのダンサーになった教え子がまだいないため、そこを目標としている。現在は、コーチ業を中心としていて、「子供たちに教え、教える中で自分自身も成長しながらきつかけ作りをしたい」と考えている。生徒に教えることは自分自身の勉強でもあるからだ。「学ぶことはまねること」「自分自身が学び続けなければアウトプットができない。子供もたちの成長を促すため、今でも努力し続けられるのだ。」

担当：原田裕希



▲「Rough Diamond」のスタジオ

東京だからできること

高橋達也さんは、烏山高校を卒業後、那須烏山市を離れ東京に上京し、22歳で漫画編集者となった。今も編集長として第一線で活躍している。「漫画」への原体験は子供の頃に、実家のある城東の「柄曲天神の祭り」で飾られていた灯籠に描かれた漫画を見たことだ。当時から強い思いが今の仕事へと結びついている。漫画に関わる仕事は地元ではできない。東京だからできる無二の仕事だ。

数年前、祭りに行きその灯籠を見ると、漫画が近所の子供たちが描いた絵に変わっていて、「変わってしまったな」と思った。それなら今の仕事のスキルを活かし、知り合いの漫画家に灯籠の絵を描いてもらいたいと考えた。しかし、その時は祭りの関係者と繋がりが無く、どうすればいいのかわからなかった。とりあえず那須烏山市と繋がろうとネットで調べ、「ふるさと烏山会」の存在を発見し入会した。

ふるさと大使に就任！

「ふるさと烏山会」とは東京に拠点を置く、那須烏山市出身者と那須烏山市を愛する者の会



〈プロフィール〉
高橋達也さん
那須烏山市出身 51歳
漫画編集者



である。高橋さんは会に入り、ブログを平成25年から始め現在も運営中。他、フェイスブックやツイッターでも発信する。

このような活動を那須烏山市が知り、平成29年に市が高橋さんを「ふるさと大使」に任命した。「ふるさと大使」とは、市町村や観光協会などの代わりに観光振興の広報活動をする人。令和元年11月まで、宣伝用の名刺を配るなど那須烏山市をPRしてきた。「名刺を受け取った人や友人などからの反応は様々だった」と言う。一方で「ふるさと大使に任命されたからといって自らの生き方に変化はない」とも言う。東京に住んでいると出会う人の大半は地方出身者で、必然的にお互いの郷里の話になるので、今まで通りに、那須烏山市について多くの人に認知してもらえようというPRする姿勢は変わらない。

ふるさととの関わり

今は月に一度、実家で一人暮らしをしている母のために帰省している。兄弟3人、交代で母の面倒をみている。家族の絆が東京と那須烏山をつないでいるのだ。冬の寒々とした景色が好きで、那須烏山市を離れてからも、ふと冬の

那須烏山市の風景を思い出すことがあるという。また、山あげ祭の時は必ず帰省している。

「那須烏山市に来る観光客が多ければそれは良いことだが、那須烏山市を市民ではない外の人を変えてしまうのは違うと思う」と言う。那須烏山市民が変化を望むならば変化すればいいし、那須烏山市を出た者としてはこのままでもいい。どのように変化しても、それが郷里の姿なのだからそれを楽しめるという。

那須烏山の未来を想う

高橋さんは那須烏山市に深い思い入れがあると感じた。東京に上京したからこそ、自分のふるさとの魅力に惹かれていたのだらう。これまで当たり前だったことに、新しい発見や感動、変化を改めて感じるのだ。歴史的なものに対して、「いいところが残って欲しいと思う反面、変化を見て楽しむこともできる」という言葉から、那須烏山市の未来を大切に思っていることが伝わってくる。

担当：齋藤拓磨





〈プロフィール〉
中山靖之さん 出身 47歳
那須烏山市 株式会社 荒川建設
代表取締役社長

地 元愛にあふれる荒川建設

株式会社荒川建設は、創業昭和38年、社員数44名（令和2年11月現在）の建設会社。創業以来、那須烏山から移転せず、地元密着の企業として親しまれている。材木問屋の親会社が建設業や土木業に進出し、荒川建設を立ち上げた。

内訳としては、土木3割、建築7割。土木では県内や管内の公共事業のほか、太陽光の事業にも携わり、建築は商業施設や社会福祉施設（高齢者施設など）の建設を請け負う。建築のうち8割以上が民間工事で、公共事業が少ないのが特徴だ。県内の会社で、ここまで民間工事の割合が多い会社は少ないという。市内の物件は極力とるよう努力し、商業施設や工業施設は宇都宮まで手を広げている。事業のウエイトが商業系にあるため、住宅建築は積極的に行っていないが、地元のなじみ客などの依頼は断らず、顧客とのつながりや仕事で得た縁を大切にしているそう。

仕事は盗んで覚えていくもの

那須烏山から宇都宮へ仕事に行く人は多いが、同社はこの逆のため、求人面では苦労しているようだ。新卒採用は、工業高校を中心とし

た高校生と大学生。中途採用は、2年に1人くらいで動きは小さい。面接で、いい人材かどうか判断し採用しているが、新卒で張り切りすぎる人は、燃え尽き症候群に陥り辞めてしまうケースがある。中途採用した従業員のほうが、辞めずに続いている。

「仕事は盗むもの、張り切ってはいけない」と社長の中山靖之さんは語る。入社前に準備したものや教科書で学んだことと、実際に仕事をするとものでは違う。そのため、入社前の事前の準備はさせない。仕事を覚え学びながら、自分で仕事が取れるようになるまで、社員一同でしっかりサポート。花が開くまでじっくりと待ち、社員の成長を見守っているのだ。

従業員幸せを作る

中山さんは、「人生を幸せにするための家族と、人生を豊かにするための1つの道具であるお金が大事だ」と力説する。家族とお金がいっかりしていなければ、自分のやりたいことが出来なくなってしまうからだ。「人生は家族がいてこそ幸せだ」との信念を持ち、家庭と仕事の両立に問題を抱える従業員の働き方を支援している。通常の就業時間は8〜17時までのところ、10〜16時までの短時間勤務を導入するなど、働きたいという社員の意欲をバックアップ。

働き方改革とはじめ

2年前から働き方改革を行い、週休2日へと変わった。しかし、現場には工期があるため、雨が降ると土曜出勤になることもあり、休日を振り替えることもある。そのため、有給休暇



の一斉取得や家庭の事情による社員の短時間勤務、水曜日をノー残業デーとするといった改革にも積極的に取り組む。「建設業は長時間労働や土曜出勤」という若者たちのイメージを少しずつ変えようとしている。また近年、公共工事では、一昔前と比べると工事の発注者も工期を長めにするようになっており、これは県の業界全体での働き方改革といえる。

現在のコロナ禍で困ったことは1つ。融資が下りなくなり、補助金の入る大きな仕事が多くなったこと。「だめだったら次の工事をとってくればいい」と、社長はすでに次のことを考えている。緊急事態宣言中、事務員は在宅勤務で対応。現場は基本屋外なので問題なし。さらに、現場には工期があるため、在宅勤務やテレワークはできない。

建設業全体では、新型コロナウイルスの影響はほとんど出ていないそう。それは、現在の事業の多くが、去年の台風の影響による復旧工事で、土木工事が特に忙しかったため。

担当：田村伊織

子育て環境は大切



〈プロフィール〉
矢口和美さん
結婚を機に那須烏山市に移住
50歳
NPO法人「野うさぎくらぶ」
理事長

皆さんは、子供たちの遊ぶ場所がないと感じたことがあるだろうか？ 那須烏山市にはそんな悩みを持っていた5人のお母さん達が始めた「野うさぎくらぶ」という放課後児童クラブがある。平成16年に高根沢町の子育て支援センターの協力を受けながら、自主サークルとしてスタート。平成19年に利用者は1,600人となり、平成21年には非常営利組織として法人設立した。現在、20歳代から70歳代の指導員30名、会員10名が所属する。

子供の成長は環境の影響を受けるため、夫婦や家族で整えてあげることが大切だ。しかし、子育ては誰もが初めての挑戦で、悩みは尽きることがない。そういう時に頼れる場所があることを知っていて欲しいと熱く語る。理事長の矢口和美さんは、「自分の子供は自分で育てたほうが後悔しない」と母から助言を受けていた。法人を設立しようとしていたタイミングで、烏山信用金庫から復職の打診があったが断り、この活動に専念することにした。

野うさぎくらぶでは経済的または精神的な悩みを抱える一人ひとりに向き合い、それを解決しながら、子供たちの育つ環境がより良くなる

ひとり親支援事業「ここから」

よう応援している。年に2、3回、学童保育の保護者に、子供がどんな悩みを持っているか考える場を設けたり、季節ごとにおさがりの服を配ったり、多岐にわたる活動をしている。今後は、自然と触れ合えるフィールドワークなど、学童とは異なる経験ができる場をつくっていききたいという。

子育てに正解はなく、多くの人がおのずと自分が育った環境を手本としている。ただし、必ずしも自分自身と子供が全く同じ状況で育つわけではないので、夫婦や家族で協力していくことが大切である。では、身近に協力者がいない場合どうすれば良いのだろうか。

野うさぎくらぶはそんなひとり親のための支援「ここから」を令和2年4月から新規事業



▲ 学校で遊ぶ子供たち

として始めた。一人では抱えきれない悩みや問題を受け止め、解決に向けてのバトン先と一緒に探すことを軸に据えている。ひとり親同士だからこそ共有できる気持ちがあり、家族でないからこそ打ち明けられることがあることも知っている。また、一人で悩みこまないように、家庭環境の相談も受けているそうだ。話を聞くことが解決の一步となることもある。多くの子供と接して培った、様々な視点から多角的に子育てを応援している。

地域の子育て協力

世界中で流行している新型コロナウイルスの影響は大きかった。子供の学校が休みでも仕事に行かなければいけない親から子供たちを預かっていたので、トイレレットペーパーやマスク、消毒液が購入できなかった時は、預かった子供たちの手洗いやうがい徹底した。

現在の事務所に移る前は、ベンチャープラザ那須烏山に事務所を借りていたが、退去しなければならなくなった。新しい事務所を探していた時、今の事務所の大家さんが「南那須に戻ってきて仕事をしないか？」と声をかけてくれた。大家さん自身には小さな子供がいなかったが、活動の趣旨に賛同し、地域のことを考え、無償の予定で貸してくれることになった。共働きが多い現在、夫婦がともに手をたずさえて、どうすればより良い子育てができるのかを考えていかなければならない。そのためにも地域の協力は欠かすことができない。那須烏山市で子育てする家庭にとって野うさぎくらぶの存在は貴重だ。

担当：石井祐樹

なすから
life

Interviews by Niwa seminar
2021年3月発行

〒320-8551 栃木県宇都宮市豊郷台1-1
帝京大学 経済学部 地域経済学科 丹羽孝仁
Tel: 028-627-7239

